

# 紀要

# 36

- 初期土偶から中期土偶への展開を読み解く  
 —精霊像としての土偶に関する認識の更新と深化を課題として—…………… 瀬口 眞司（1）
- 古墳時代の「石杵」状石製品について  
 —蒲生郡日野町播沢遺跡出土事例の紹介—…………… 辻川 哲朗（17）
- 群集墳の築造と被葬者像  
 —太鼓塚古墳群を素材として—…………… 堀 真人（24）
- 古墳時代の大刀形製品にかかる覚書…………… 宮村 誠二（40）
- 長浜市八雲書院資料調査報告＜瓦編2＞…………… 福井 知樹（45）
- 遺物三次元計測の実験的試行…………… 山田梨紗子・福井 知樹（64）
- 滋賀県埋蔵文化財地域展Ⅳにおける試みとその成果  
 —「広げる」「深める」「育てる」「つながる」展示へ—…………… 木下 義信（78）

## 群集墳の築造と被葬者像

### —太鼓塚古墳群を素材として—

堀 真人

#### 目次

1. はじめに
2. 調査成果の解釈と課題
3. 太鼓塚古墳群の支群の検討
4. 太鼓塚古墳群の平面プランの検討
5. 古墳群の形成について
6. 古墳群形成モデルの提唱
7. おわりにかえて

### — 論 文 要 旨 —

滋賀県大津市に所在する志賀古墳群は、渡来人の奥津城として著名な古墳群である。

古墳群を構成する古墳の中には、埋葬施設として方形もしくは横長方形の平面プランで、急激に四壁を持ち送る穹窿頂石室がみられ、副葬品としてミニチュア炊飯具や釵子、指輪、釧などの装飾品を持つ。被葬者は、釘留式の木棺に入れられることが多いなど、通有の古墳と異なる特徴を持つ古墳が多く含まれる。また、古墳群が築かれた比叡山東麓の扇状地では、大壁建物やオンドル遺構が検出されており、渡来人が居住していたことが明らかになっている。その点も志賀古墳群が、渡来人の墓であることを補強している。

しかし、巨視的には渡来人の墓であることは間違いないが、微視的には石室の平面プランも通有の長方形プランの比率が最も高く、ミニチュア炊飯具の出土率も志賀古墳群全体でみれば5割にも満たない。つまり、特徴的であるが、すべてにあてはまるわけではない。本稿では、このように様々な平面プランの古墳が混在している状況や、ミニチュア炊飯具を副葬する古墳としない古墳の違いは何なのかを説明することを試みた。これらの問いに対する説明は、被葬者に在地人と渡来人が含まれ、その違いで説明されることが多かった。しかし、筆者は、副葬土器の配置や平面プランの検討から志賀古墳群が非常に斉一性の高い古墳群と評価し、その被葬者は渡来人集団であると考えており、従来の見解に無条件で従うことはできない立場である。

そこで、本稿では、志賀古墳群の中で最も資料が整っている太鼓塚古墳群を素材として、既往の研究を紐解きながら、古墳の分布（支群分け）と石室の平面プランの二つの検討から、古墳群の形成原理を明らかにすることを目的とした。

その検討の結果、太鼓塚古墳群に埋葬されている集団は、古墳群の周辺地域で活動している人がそのまま埋葬されるのではなく、別の地域で活動していた人が埋葬される「帰葬」であったと想定した。それは、被葬者が、出自等に規定される集団と、平時生活をしている活動集団の2つに所属しており、古墳を築造する場所の選定では出身集団が重視され、活動集団は、石室の平面プランやミニチュア炊飯具の有無を規定すると考えた。

本稿で提起した仮説モデルで、目的とした問いに対する回答を提示することができたが、それには、様々な前提条件が存在しており、今後、様々な具体的な事例で検証することが必要である。その点では、まだまだ課題が多く残されており、当時の実態の解明にわずかに一歩踏み出したに過ぎない。

#### ——— キーワード

志賀古墳群 太鼓塚古墳群 渡来人 帰葬 支群の形成 石室平面プラン ミニチュア炊飯具

## 1. はじめに

古墳時代とは、前方後円墳に代表される大型古墳の成立によって社会的な秩序が形成された時代である。その中にあって、古墳時代後期は、埋葬施設として大陸由来の横穴式石室の導入、それをきっかけとして爆発的に古墳が造られるようになる時代である。その背景には、東アジアの状況が不可分であるものの、国内の社会的な変化を抜きにして理解することはできない。

群集墳の研究は、社会構造の解明に寄与してきたといえる。古墳の分布や規模、石室構造、副葬品等の分析とおして階層性、社会組織の在り方を明らかにしてきたからである。最近では、群集墳の多角的な分析をとおして、群集墳が表徴しているものは何なのかを再検討する試みも行われている（古代学研究会編 2021）。

筆者は、群集墳、特に志賀古墳群（1）の分析をとおして、渡来人の存在、あり方を明らかにする試みを行ってきた（堀 2012・2019・2020・2021a）。志賀古墳群は、水野正好氏によって、①玄室の平面プランが方形や横長方形の石室の存在、②奥壁、側壁の持ち送りが急で天井石を1～2石で構築する手法、③ミニチュアの甗、甕、移動式カマドを基本とした炊飯具セットの出土などの特徴が目立つ古墳群として整理された。そして、これらの特徴を有する古墳を、文献資料にみられる当該地域居住氏族と関連付けることにより、渡来人の墓域であると結論付けた（水野 1969）。その後、花田勝広氏が、水野氏も指摘した特有の石室、ミニチュア炊飯具・釵子の副葬品等の共通性と、周辺地域におけるオンドルや大壁建物を採用する集落の存在などから、改めて渡来系氏族の存在を明らかにした（花田 1993）。

しかし、渡来人が埋葬されていると考えられる志賀古墳群にみられる特徴が、どのような形成原理を経た結果、発掘調査の成果として目の前に現れるのか、具体的に明らかにできていないと感じている。筆者は、これまでに志賀古墳群全体を俯瞰しながら、副葬品配置や玄室の平面プランを材料に検討を重ねてきた。そこでは、個別の石室の検討をとおして、共通性の抽出やその変遷を明らかにしたが、それぞれの石室、古墳間の関係性については、説明ができていないと考えている。

そこで本稿では、志賀古墳群を構成する一古墳群（行政上の埋蔵文化財包蔵地）、太鼓塚古墳群の調査成果を素材に分析することで、古墳が築造され、そこにみられる特徴はどのような原理で表出しているのか、それを解決する手掛かりを得ようと思う。

## 2. 調査成果の解釈と課題

### (1) 調査成果

太鼓塚古墳群は、滋賀県大津市高砂町から滋賀里に分布する古墳群である（図1・2）。1970年代から宅地開発等の開発事業に伴い、たびたび調査が実施されてきた。その

結果、県道（主要道路伊香立・浜大津線）から国道161号バイパス付近にかけて60基ほどの横穴式石室が発見されている。

それらの調査成果の中で、①1977・78年に実施された個人住宅等に係る調査（大津市教委1980：以下、住宅開発調査）および②1986年から1991年に実施された西大津バイパス（現国道161号バイパス）建設に伴う調査（大津市教委1992：以下、バイパス調査）を本稿の検討の材料とする。この2つの調査は、調査地点が隣接しており、面的に古墳の分布状態がわかること、報告書が刊行されていることから選択した。住宅開発調査では8基の横穴式石室、バイパス調査では21基の横穴式石室と4基の竪穴系小石室が検出されている。

その調査成果の概要は、調査報告書に基づく次のように整理できる。

**築造時期** 古墳群の築造は、6世紀中頃から7世紀中頃で、その中心は6世紀末から7世紀初頭である。

**検出された埋葬施設** 両袖式石室が11基、右袖式石室（2）が17基、玄室が調査区外のため石室形態の不明が1基、竪穴系小石室4基、土器棺墓が4基検出されている。

**ミニチュア炊飯具出土石室** ミニチュア炊飯具（ミニチュアの移動式カマド、カマ（羽釜・甕）、甗、鍋）は、19基／29基（約66%）の石室から出土している。

### (2) 調査成果の解釈

前項で整理した調査成果、特にバイパス調査においてその評価がまとめられているので、概観しておきたい。

#### ①大津市の見解（大津市教委1992：以下、大津市案）

バイパス調査地点における見解となる。横穴式石室および竪穴系小石室、全25基を、調査成果に基づく地形復元から5支群に分けている。調査区の北側からA群（9号墳）、B群（10～17号墳）、C群（18～25号墳）、D群（26～29号墳）、E群（30～33号墳）である。築造時期は、最も古い古墳である33号墳が6世紀中頃から後半、最も新しい古墳は30号墳で、追葬段階の7世紀中頃としている。

そして、古墳の位置関係、出土土器からわかる築造時期の前後関係から、各群の築造状況を復元している。ただし、A群は9号墳のみのため検討されていない。

**B群** 10・11号墳、14・15号墳、16・17号墳の3つの小支群を見出している。副葬品の時期から10号墳→15号墳→16号墳→12号墳→17号墳となる。結果、小支群では10号墳→11号墳、15号墳→14号墳、16号墳→17号墳、12号墳→13号墳である。ただし、石室形態から13号墳→12号墳の可能性もあるとしている。

**C群** 18・19号墳、20～23号墳、24・25号墳の3つの小支群が見出される。この小支群内では前後関係があり、18号墳→19号墳、20号墳→22・23号墳、20号墳→21号墳である。22・23号墳、は同一墳丘に造られた石室で



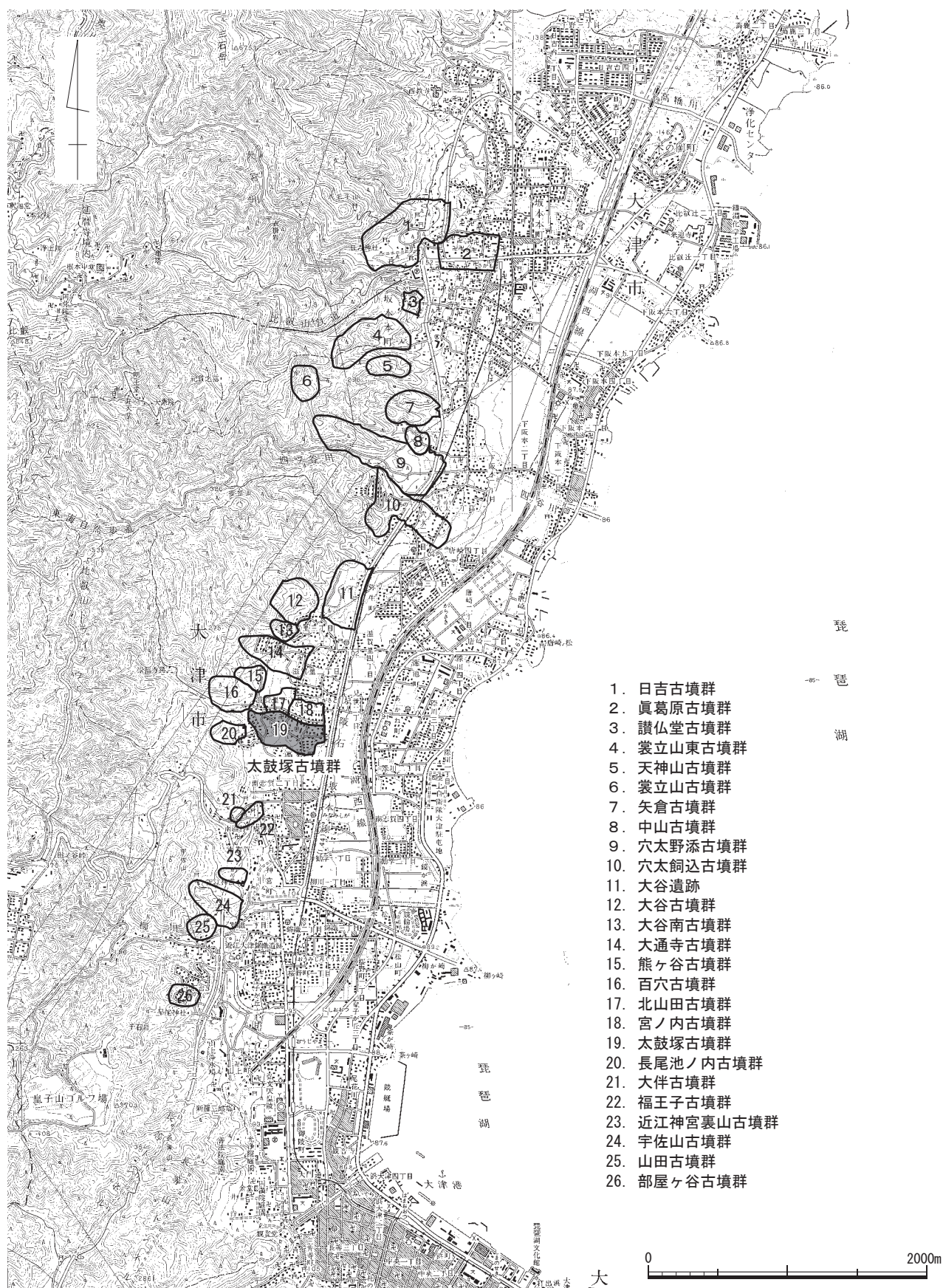


図1 太鼓塚古墳群位置図

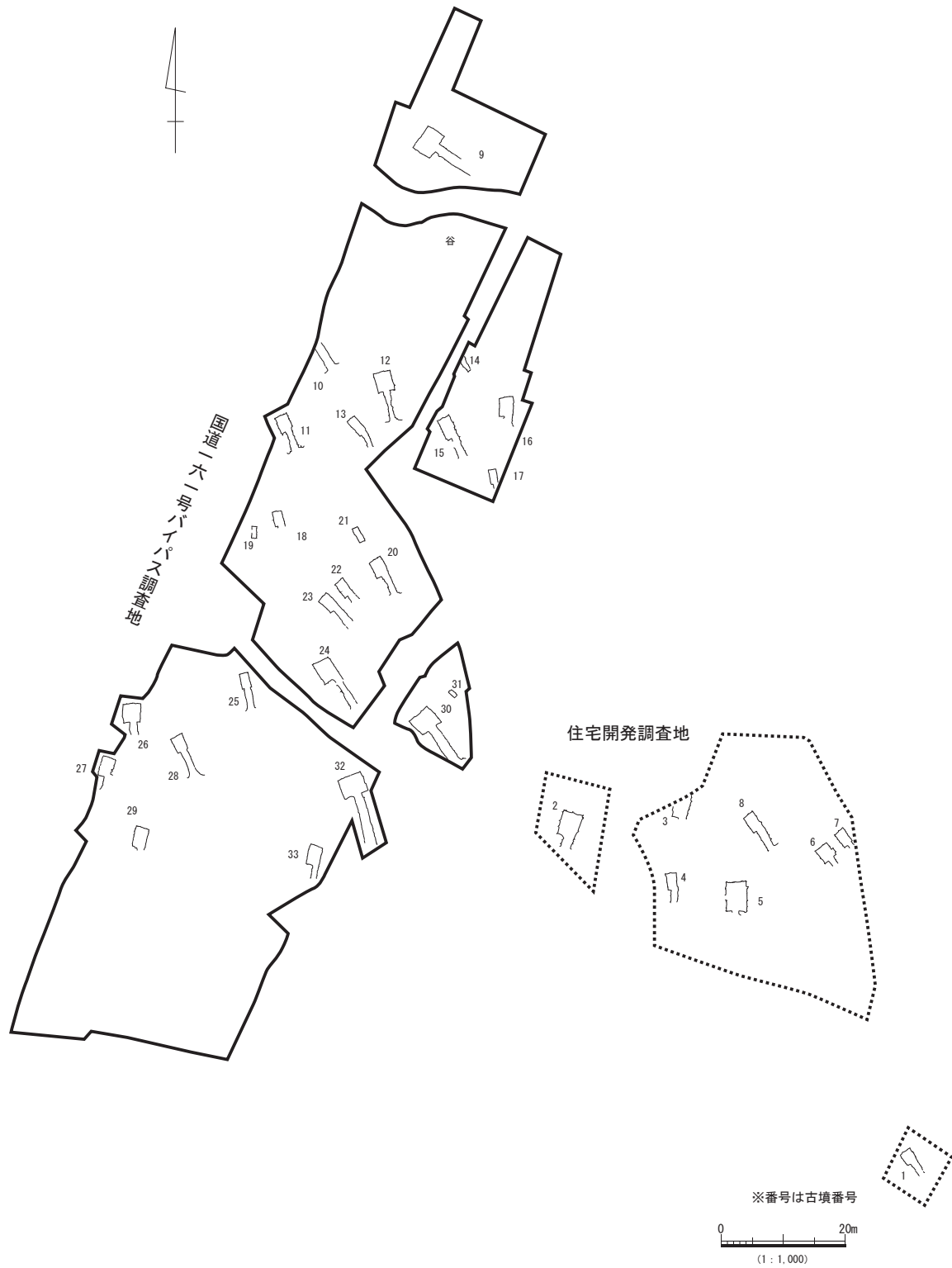


図2 太鼓塚古墳群分布

あり、20・22・23に副葬されていたミニチュア炊飯具セットの作りが非常によく似ていることから、同技術あるいは同一工人によるものと推定している。24号墳と25号墳は、ともに採用している埋葬施設が両袖式石室であることから関連するものと評価している。

**D群** 26・27号墳、28・29号墳の2つの小支群に分けられる。築造順序は27号墳→29号墳→26号墳→28号墳として、小支群内では27号墳→26号墳、29号墳→28号墳と評価している。なお、26・27号墳はともに複次葬（追葬）もしくは複数の被葬者の単次葬を想定している。

**E支群** 30・31号墳、32・33号墳の2つの小支群を想定している。築造順序は、副葬品の年代観から33号墳→32号墳→31号墳（報告書では33号墳と記載、間違いか）と評価して、小支群内の築造順を33号墳→32号墳、30号墳→31号墳と想定し、30号墳の追葬を31号墳と同時期に推定している。

## ②小笠原氏の見解（小笠原 2000：以下、小笠原案）

小笠原氏は、バイパス調査の成果を、地形と石室の主軸方位を手掛かりに北側からA群（9号墳）、B群（14～17号墳）、C群（10～13号墳）、D群（18～25号墳）、E群（30～33号墳）、F群（26～29号墳）の6群に分けている。各群3～4基で構成され、D群のみ6基と他群と比較すると大きなグループとしている。そして、石室を玄室の平面プランと袖形式を基にA～D型の4つの分類を行い（3）、各群の特徴を見出している。

石室分類B型の12・26・30号墳は、玄室面積が他型式と比較して広いことや器台、ミニチュア炊飯具を副葬していることから階層的に上位の古墳と位置付けている。そのことを踏まえ、C、F群はB型1基と3基前後のA型、E群は1基のA型と2基のB型と、石室の組成を根拠として、支群に階層差があることを示唆している。

そして、群全体を渡来系氏族によって構成される古代家族墓であると結論付けている。

## ③松浦氏の見解（松浦 2003：以下、松浦案）

松浦氏は、大津市のバイパス調査成果とミニチュアカマドを手掛かりに4つの子群（4）に分けている。

北側からA群（9号墳）、B群（10～23号墳）、C群（24～25・29～33号墳）、D群（26～28号墳）である。そして、子群同士の関係性を、主にミニチュアカマドの型式差（5）から読み解いている。

**A群** 9号墳が、単独で築造されているような様相を示していることから、盟主的な一群としている。

**B群** A型式のカマドを副葬していることから、同一家族の墓域の可能性を指摘している。特に20・22・23号墳は、ともにA型式I類が出土していること、また、隣接して築造されている10・11号墳、12・13号墳、16・17号墳の被

葬者も立地を根拠に近い血縁者としている。その上で、10号墳→16号墳→12号墳の変遷を読み取り、同じ群内でもB型式のカマドを副葬する15号墳は異系列の血縁者と理解している。

**C群** 稚拙な作りのC型式のカマドが出土している29号墳と33号墳、C型式に近いD型式が出土している24号墳、A型式とD型式中間的な様相を呈するAD型式が出土している32号墳を、カマドの型式的な近さを評価して、一定のまとまりを見出している。

**D群** 他の型式と大きく異なるE型式のカマドが出土している26号墳、他の群の古墳と開口方向が異なる27・28号墳をD群としている。

## ④藤村氏の見解（藤村 2021：以下、藤村案）

藤村氏は、石室の構築の観点からバイパス調査、住宅開発調査で明らかになった古墳の関係性を読み解いている。太鼓塚古墳群の在り方は、近畿および近江の他の群集墳との比較から、穹窿頂石室統一型の群集墳として評価している。

築造時期を手掛かりに4群に分けている。北側から展開期の群③（9号墳）、形成－展開期の群②（6～8・10～17号墳）、展開期の群①（18～25・30～32号墳）、形成契機期の群（26～29・33号墳）である。

築造のピークをTK43型式並行期から飛鳥I型式並行期とし、大型の墳丘および両袖石室を採用した有力階層の古墳（9・10・12・30・32号墳）と、それに従属する他の古墳の組み合わせで、群内の古墳の築造が展開していくと解釈している。

## (3) 調査成果の解釈からみた課題

調査成果を基にした太鼓塚古墳群に対する解釈について、共通している部分と差異についてまとめる。それにより課題を明確にしておきたい。

### ①築造時期

築造時期についてはおおむねTK10型式並行段階からTK43型式並行段階に築造が開始され、TK217型式並行段階で終了する点は一致している。なお、本稿では、古墳の築造時期を出土した土器類および石室形態から次の時期で区分した（田辺 1966・1981）。

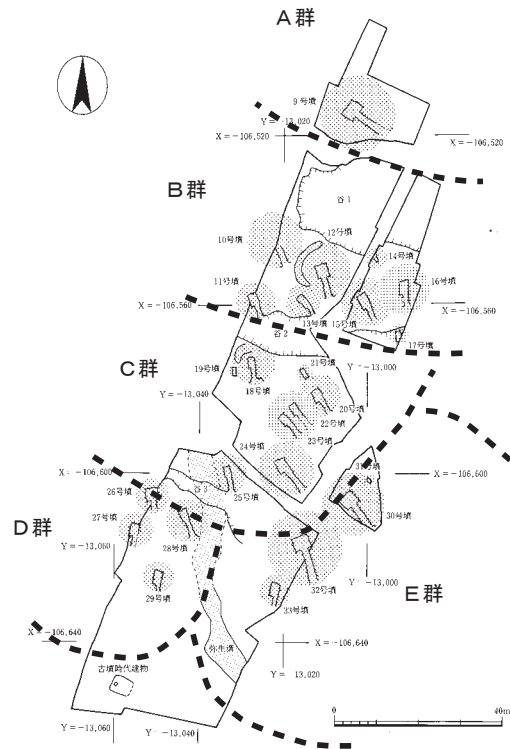
- I期 TK10型式～TK43型式並行段階
- II期 TK43型式並行段階
- III期 TK43型式～TK209型式段階並行期
- IV期 TK209型式並行段階
- V期 TK209型式～TK217型式並行段階

上記の区分に沿うと、本稿における各古墳の時期の比定は、次のとおりである。

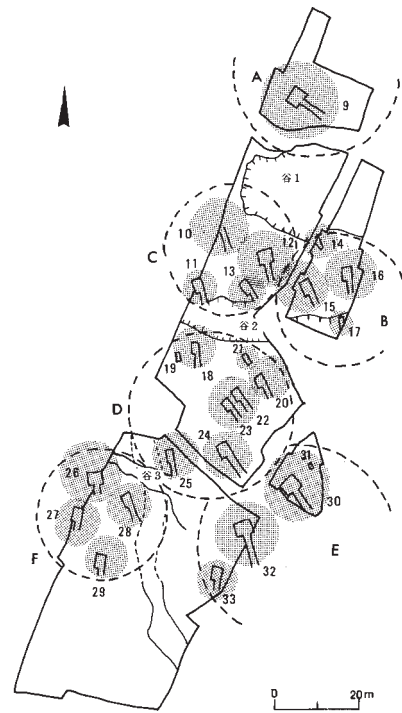
- I期 3号墳、13号墳、27号墳、29号墳、33号墳



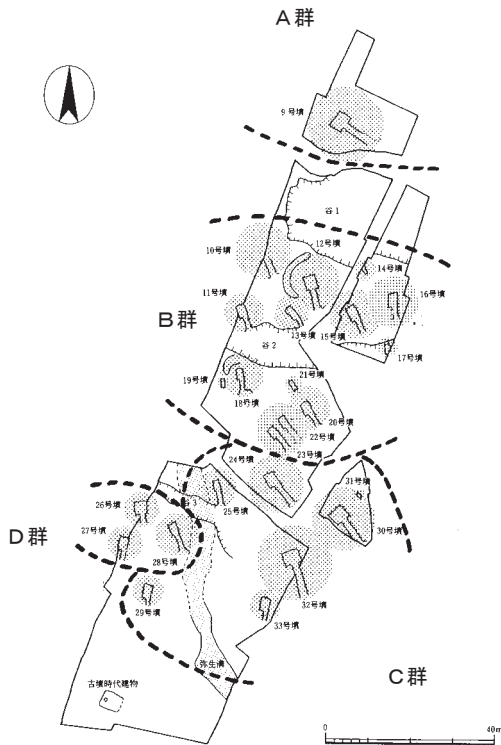
◆大津市案（大津市教委 1992）



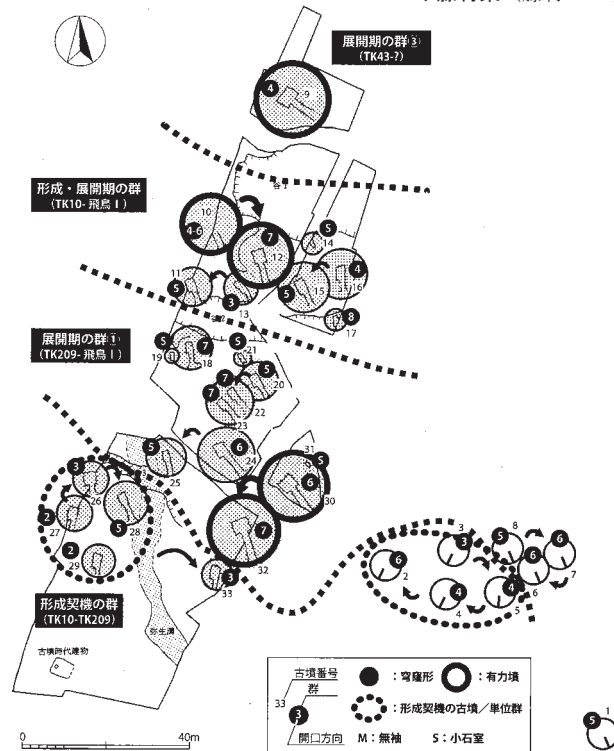
◆小笠原案（小笠原 2000）



◆松浦案（松浦 2002）



◆藤村案（藤村 2021）



※S=1/1,800

図3 太鼓塚古墳群の支群設定

- Ⅱ期 5号墳、24号墳  
 Ⅲ期 7号墳、26号墳  
 Ⅳ期 1号墳、2号墳、4号墳、6号墳、9号墳、10号墳、12号墳、15号墳、16号墳、18号墳、22号墳、23号墳、28号墳、30号墳、32号墳  
 Ⅴ期 8号墳、11号墳、17号墳、20号墳、25号墳

## ②支群の設定

調査で明らかになった範囲で、4～6つの複数の支群に分けることができる点については共通している。しかし、対象とする範囲については、大津市案は、調査報告書という性格上、バイパス調査の調査対象地に重点を、小笠原案と松浦案は検討をバイパス調査のみで行っている。その結果、大津市案・小笠原案・松浦案と藤村案では、範囲が異なっている。さらに、支群分けの基準を何に置くかで、各案の支群境の線引きが異なっている。

大津市案は、調査報告書であることから調査成果の事実関係の整理が中心である。そのために、調査で明らかになった地形から支群分けを行い、その支群内の古墳築造の動向を出土土器の年代観から整理を行っている。

小笠原案は、地形による区分を基礎としながら、支群に含まれる古墳の基数を意識して、群分けを行っている。そして、石室分類B型を上位古墳と位置づけ、支群間においても階層差があると読み解いている。

松浦案は、石室から出土したミニチュアカマドの型式差を手掛かりに、各支群の関係性を読み解いている。つまり、支群分けにもミニチュアカマドの型式差が反映されている。

藤村案は、県内外他地域の古墳群と比較するために、築造期間、石室構造からみた群の構成、群内における階層性の抽出に力点を置いている。他の古墳群と共通した要素を整理することで、各古墳群の共通項、差異を明らかにするためである。そのため、どうしても古墳群単体を見ると深化が足りないことは仕方がないと思われる。

このように、支群分けをする基準をどこに置くかで、結果が異なってくる。つまり、支群分けは、古墳群をどのように理解しているかにも左右されることが明らかとなった。

## ③検討の視点

太鼓塚古墳群をどのように理解するか、当然ながら調査報告書を基礎として、群集墳が持つ様々な要素から焦点を絞り、解釈する、そしてその結果が小笠原案や松浦案、藤村案である。しかし、これらの案だけでは、古墳間の関係性や古墳間にみられる差異、ミニチュア炊飯具を持つ古墳、持たない古墳、右袖式石室と両袖式石室が混在している意味を十分に説明できているとは言えない。この問いは、いみじくも藤村氏が太鼓塚古墳群の解釈を提示したシンポジ

ウムで想定された①群集墳における小支群とはなにか、②小支群の集合体としての群集墳とはなにか、③群集墳から家族・集団がどこまで理解可能かの3つの目的（絹島2021）に合致する。

本稿では、古墳群を理解する基礎として改めて支群を設定し、併せて、ミニチュア炊飯具をはじめとした土器を使用した葬送儀礼が、石室の平面プランと関連していると考え（堀2019・2021）立場から、太鼓塚古墳群における平面プランについて検討する。そして、この二つの検討から最終的に古墳群の形成がどのような原理で行われたかを明らかにする。それにより古墳間の関係性やミニチュア炊飯具を持つ古墳、持たない古墳の意味に迫れると考えた。

## 3. 太鼓塚古墳群の支群の検討

前章で整理したように、太鼓塚古墳群の支群設定は、バイパス調査時の報告書内（大津市案）、地形や構成する古墳の基数、石室形態の分類を重視して設定した小笠原案、ミニチュア炊飯具の型式差を重視して設定した松浦案、県内外の群集墳との比較を目的として整理した藤村案の4つの案が公表されている（図3）。

まず、支群分けの対象とする範囲について明確にしておく。大津市案、小笠原案、松浦案は、バイパス調査区の東側に位置する住宅開発調査区が含まれていない。藤村案では、各古墳の配置が正確ではないが、住宅開発調査区が含まれている。本稿では、報告書に掲載されている位置図を頼りに住宅開発調査区の復元を行い、検討の対象とした。

4案をみると、調査対象範囲の最も北側に位置するA群(6)の範囲は、すべての案で共通している。9号墳と10号墳－12号墳－14号墳をつないだラインの間に入る谷1をB群との境としている（a群）。

そのA群の南側に位置するB群は、大津市案と藤村案は共通しており、バイパス調査報告の谷2（11号墳－13号墳ラインと18号墳－21号墳ラインの間に位置する）でB群とC群の境を設定している。他方、小笠原案は、12号墳－13号墳ラインと14号墳－15号墳ラインの間にB群とC群の境を設定している。つまり、大津市案と藤村案ではB群としている支群を、小笠原案では2つの群に分けている。松浦案は、B群の範囲を南側に広げ、23号墳と24号墳の間にB群とC群の境を設定している。この違いは、地形を重視して群境を設定している大津市・藤村案と支群の規模を重視する小笠原案、ミニチュア炊飯具の型式差を重視して群境を設定した松浦案の群分けの基準の違いに起因している。

そこで、A－B群の境を地形（谷）で線引きしたことと一貫性を保つために、地形を重視して谷2でB－C群の境を設定する（b群）。

C群は、大津市案と藤村案は共通している部分が多いが、30～33号墳をE群として独立させる大津市案、26号墳－



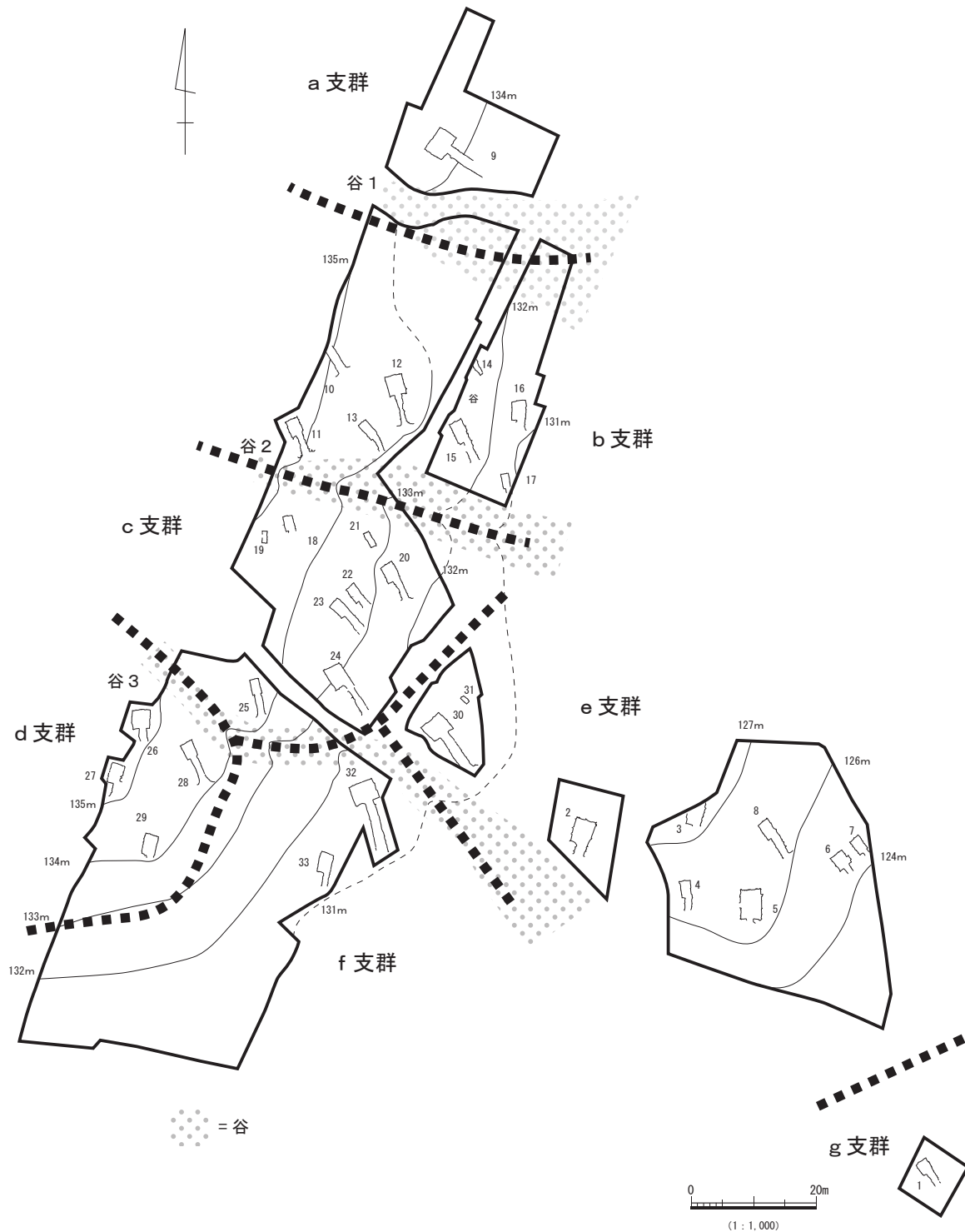


図 4 太鼓塚古墳群支群案

28号墳－33号墳のラインと25号墳－32号墳のラインの間に群境を設定する藤村案の違いがある。大津市案は、地形を重視し、谷3とすでに埋没している弥生時代の溝を評価して群境を設定している。藤村案は、33号墳が群内でも初期に築造されている古墳であることを評価し、33号墳と32号墳の間でC群とD群の境を設定している。小笠原案は支群名こそ異なるが、大津市案のC群に相当する範囲で設定している。

B－C群の群境を、A・B群と同様に地形を重視するならば、大津市案となるが、すでに古墳築造時に埋没している弥生時代の溝を地形の変換点として評価するか否かは判断が分かれるところである。その判断を行う材料として、報告書内では明確にされていないが、谷3がどこまで延びているかを検討する必要がある。まず、33号墳、30号墳までは広がっているか否かは、調査結果からは不明である。そこで30号墳の南東に位置する2号墳・4号墳の石室の開口方向に注目する。ともに住宅開発調査で検出された古墳である。30号墳、32号墳は、南東方向に開口しているのに対し、2号墳、4号墳は、ともに南開口である。石室が開口している方向が、等高線と直交すると考えるならば、30号墳・32号墳は、谷を挟んでそれぞれ南東に延びる小さな尾根上に立地し、2号墳と4号墳は、30号墳が立地する尾根の南側斜面の谷側に開口していると復元することができる。つまり、谷3が30・32号墳の間から2号墳、4号墳の南側まで延びていると判断した。

このことから、弥生時代の溝ではなく、谷3を評価し、C群とD群の群境、は25号墳－24号墳－20号墳のラインで引く（c群）。

D群は、C群で重視した地形の変換点である谷3と古墳のまとまりを重視して、大津市案を採用する（d群）。

大津市案では、30～33号墳をE群として設定しているが、C群を設定した際の理由により30・31号墳のみを別群とし、それに住宅開発調査区の7基（2～8号墳）加えた（e群）。ただし、1号墳は2～8号墳と離れていることから別支群（g支群）とした。

また、大津市案でE群としていた32・33号墳は、31・32号墳との間に谷が入ると考えたことから新たな群として設定した（f群）。

以上のようにバイパス調査地と住宅開発調査地の双方を対象とし、地形の変換点（谷）を重視する中で、古墳のまとまりを評価して新たな支群分けを行った（図4）。新たな支群分けでは、支群名をa～g群の7群とした。

#### 4. 太鼓塚古墳群の平面プランの検討

##### (1) 平面プランの検討の方法

石室は、縦、横、高さから成る三次元の構築物であることは言を俟たない。そのことから、本来であれば石室を分類する方法としては、小笠原氏のような分類が望ましい。

しかし、三次元の要素で分類すると古墳の遺存状態に大きく左右され、そのことで資料的な制約が生じ、対象となる資料が限られてしまう問題がある。一方で、平面プランに絞ることで、資料数が確保できる利点生まれる。

また、石室構築は、現代のように規格のあるブロックのような材料で組み立てられるわけではなく、天然の石材を使用するため、サイズも千差万別である。そのため、仮に設計図があったとしても、実際に構築する時は、手持ちの材料の中で処理していったと考えられる。同じことが平面だけではなく、高さを加えた三次元になれば、その調整する誤差がより大きくなる可能性が高い。つまり、三次元の規格を考えるより、二次元の平面プランの方が、不確定な要素を減らすことができるメリットも併せて生まれることとなる。

その上で、前述のような誤差だけではなく、調査時に計測する場所で数値が変わる。具体的には、平面プランの基準となる横断面が床面直上ではないこと、計測単位が10cm単位の計測が多いことなど、数値に誤差が生じる原因が複数考えられる。その点を踏まえるならば、平面プランの検討に際しては「傾向を認める」ことを目的とするので、同型石室等の確認は、1/100の平面図を重ね合わせる方法で十分と判断し、採用した。

##### (2) 具体的な平面プランの検討（図5・6）

太鼓塚古墳群のバイパス調査および住宅開発調査では、計29基の横穴式石室が検出されているが、竪穴系小石室や土器棺墓など他の型式の埋葬施設は対象としない。また、平面プランの検討をするにあたり、石室、特に玄室の形態が不明な場合は除外することとした。具体的には、羨道のみを検出である10号墳である。残り28基が対象となる。

対象となる28基の横穴式石室の内訳は、右袖式石室が17基、両袖式石室が11基である。

右袖式石室で9タイプ、両袖式石室で6（7）タイプを抽出した志賀古墳群内の同形石室を検討した成果（堀2021a）を踏まえ、太鼓塚古墳群の横穴式石室の同形・相似形石室の抽出を改めて行った。

石室の同形石室と相似形石室は次のとおりである（図5・6）。

##### ①右袖式石室

i) A類（大通寺G-1号墳タイプ：同形石室／相似形石室）

16号墳（Ⅲ／b）(8)・20号墳（Ⅳ／c）

玄室規模：2.8～3m×2.1～2.2m

ミニチュア炊飯具：有

（同形石室×1.2）

24号墳（Ⅱ／c）

玄室規模：3.6m×幅2.8m

ミニチュア炊飯具：有

ii) B類（大谷3号墳タイプ：同形石室）

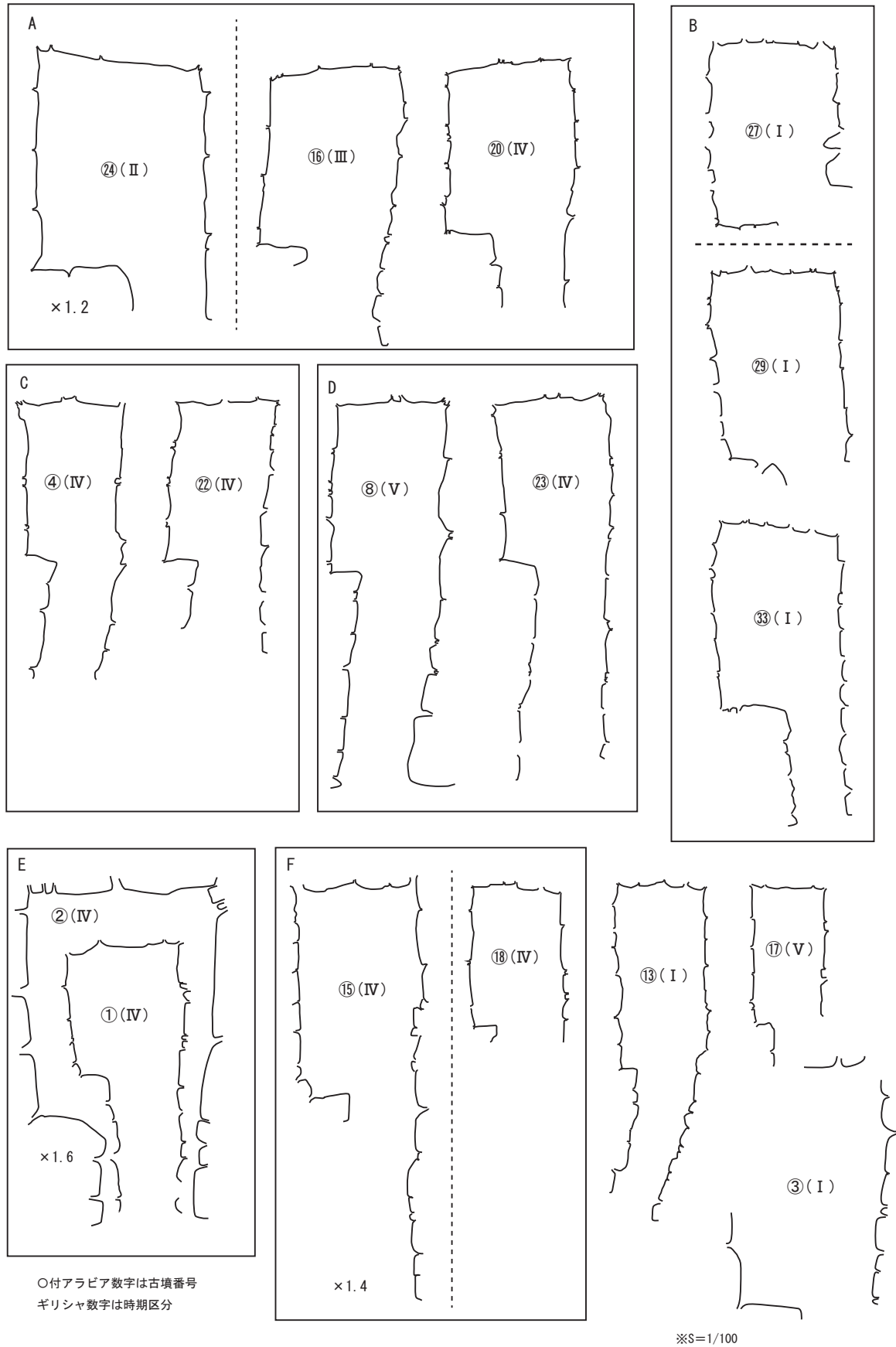
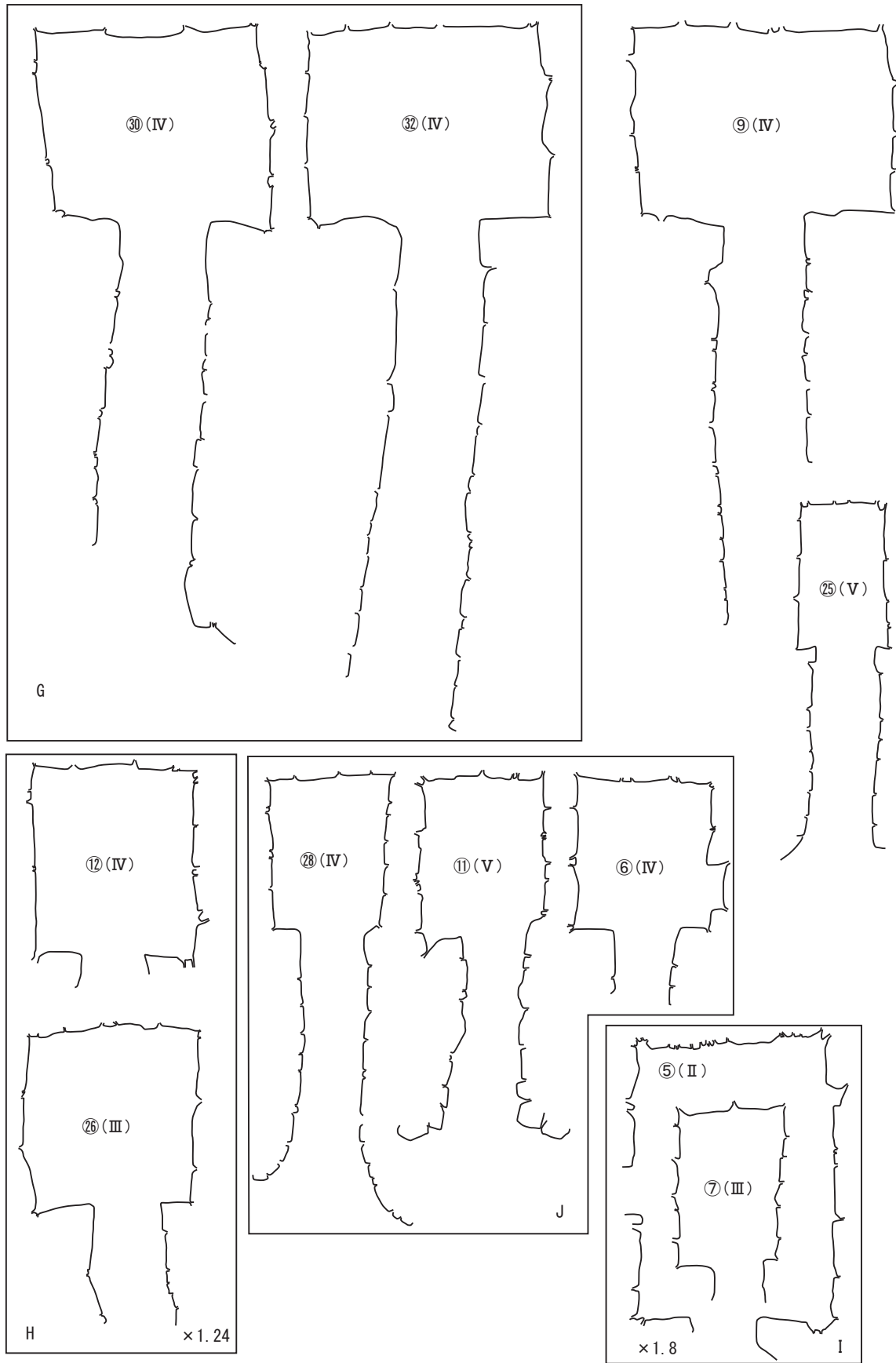


図5 太鼓塚古墳群右袖式石室平面プラン





※S=1/100

図6 太鼓塚古墳群両袖式石室平面プラン

27号墳（Ⅰ／d）・29号墳（Ⅰ／d）・33号墳（Ⅰ／f）  
 玄室規模：3.15～3.3 m×2.15～2.2 m  
 ミニチュア炊飯具：有（29・33号墳）、無（27号墳）

iii) C類（穴太飼込4号墳タイプ：同形石室）

4号墳（Ⅳ／e）・22号墳（Ⅳ／c）  
 玄室規模：2.6～2.7 m×1.6 m  
 ミニチュア炊飯具：有

iv) D類（福王子16号墳タイプ：同形石室）

8号墳（Ⅴ／e）・23号墳（Ⅳ／c）  
 玄室規模：2.7～2.8 m×1.8～1.9 m  
 ミニチュア炊飯具：有

v) E類（大通寺32号墳タイプ／相似形石室）

1号墳（Ⅳ／e）×1.6  
 玄室規模：2.2 m×1.9 m  
 2号墳（Ⅳ／e）  
 玄室規模：3.4 m×2.8 m  
 ミニチュア炊飯具：有

vi) F類（大通寺30号墳タイプ／大通寺41号墳タイプ：相似形石室）

15号墳（Ⅳ／b）  
 玄室規模：3.5 m×2.2 m  
 ミニチュア炊飯具：有  
 18号墳（Ⅳ／c）×1.4  
 玄室規模：2.4 m×1.5 m  
 ミニチュア炊飯具：無

②両袖式石室

i) G類（大通寺36号墳タイプ：同型石室）

30号墳（Ⅳ／e）・32号墳（Ⅳ／f）  
 玄室規模：3.2 m×3.8～4 m  
 ミニチュア炊飯具：有

ii) H類（太鼓塚26号墳／太鼓塚6号墳タイプ：同形石室／相似形石室）

12号墳（Ⅳ／b）・26号墳（Ⅲ／c）  
 玄室規模：2.9～3.1 m×2.7～2.85 m  
 ミニチュア炊飯具：有

6号墳（Ⅳ／e）  
 玄室規模：2.5 m×2.2 m  
 ミニチュア炊飯具：有

iii) I類（大谷2号墳タイプ：相似形石室）

5号墳（Ⅱ／e）  
 玄室規模：4.5 m×3.1 m  
 ミニチュア炊飯具：有

7号墳（Ⅲ／e）×1.8  
 玄室規模：2.5 m×1.7 m  
 ミニチュア炊飯具：有

iv) J類（同形石室）

11号墳（Ⅴ／e）・28号墳（Ⅳ／d）

玄室規模：2.3～2.5 m×1.95～2 m  
 ミニチュア炊飯具：無

(3) 小結

平面プランは、A～J類まで10パターンの同形、相似形の石室を確認することができた。そして、同形石室は、基本2基一組であることが分かった。同形・相似形の石室の属性について概観しておく。

**時期** 時期は、比定される石室の数が多いⅣ～Ⅴの石室が多い。さらにⅡ期は、比定される石室が少ないこともあり、確認できなかった。同形・相似形として認定できる石室の組み合わせは、同時期もしくは前後する時期である。

**ミニチュア炊飯具の有無** 同形・相似形の石室で有無が共通する傾向がある。しかし、無の評価については、後世のかく乱が激しい場合や石室の再利用が認められる場合など、石室の遺存状態に大きく左右されるため、評価が難しい。

ミニチュアカマドの型式(9)と同形・相似形石室との関連性は見出されない。

**支群との関係** 同形石室の組み合わせは、支群が異なる傾向が認められる。相似形石室は、同形石室と同支群である場合と、異なる場合がある。

5. 古墳群の形成について

(1) 太鼓塚古墳群の在り方

支群設定、平面プランの検討を行った。支群の設定は、先行する研究の成果の検討を踏まえ、地形および分布状況を手掛かりに再設定を行った。a～g支群の7支群である。

平面プランの検討では、A～J類までの10分類の同形・相似形石室を抽出することができた。そして、①同形石室は2基一組を基本としていること、②支群を異にしていること、③築造時期が同時期もしくは前後する時期であること、④同形石室ではミニチュア炊飯具の在り方が共通していること、⑤相似形石室は、2基の同形石室の1基と支群を同じくしていることがわかった。

この中の④の妥当性を、志賀古墳群内で検討した同形石室の成果（堀 2021a）を使って確認する。結果、同一古墳群内における同形石室は、その傾向を同じくしていることが追認できた。例えば、穴太飼込1号墳タイプに分類できる穴太飼込1号墳と同3号墳、福王子16号墳タイプに分類できる福王子1号墳と同16号墳である。また、③時期についても、同時期もしくは連続する時期であることが共通している。

(2) 太鼓塚古墳群の築造変遷

前章までの検討を通じてみてきた太鼓塚古墳群の形成過程は次のように復元できる。

I期にd支群の27号墳が、最初に築造される。太鼓塚

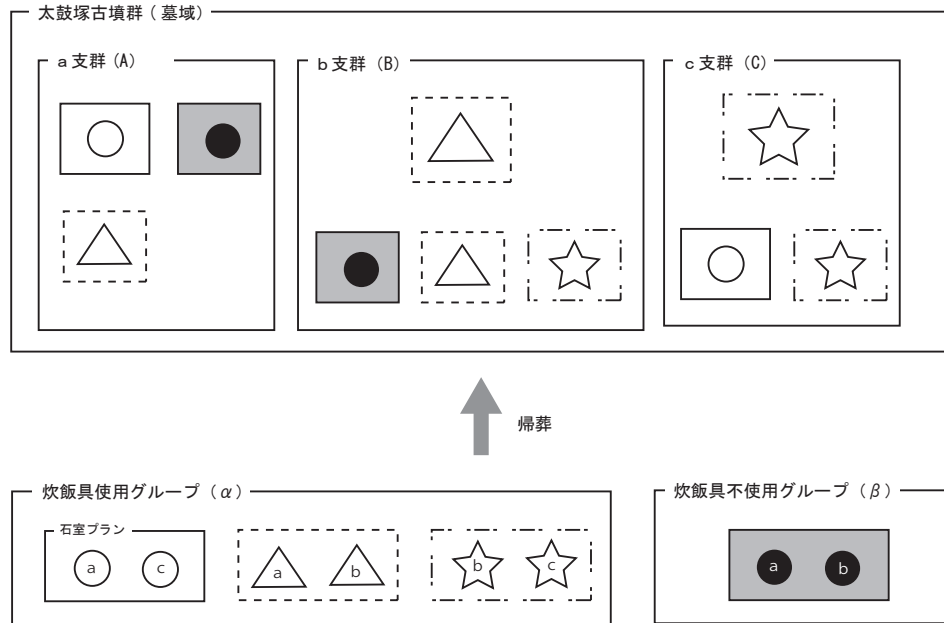


図7 太鼓塚古墳群形成モデル

| 古墳名     | 袖 | 時期   |      |       |       | 支群 | 玄室比  | 面積   |      | 玄室規模 |   | 平面プラン | 炊飯具             | 備考 |
|---------|---|------|------|-------|-------|----|------|------|------|------|---|-------|-----------------|----|
|         |   | TK10 | TK43 | TK209 | TK217 |    |      |      |      | 長さ   | 幅 |       |                 |    |
| 太鼓塚1号墳  | 右 |      |      |       |       | g  | 1.16 | 4.2  | 2.2  | 1.9  | E | 付1A   |                 |    |
| 太鼓塚2号墳  | 右 |      |      |       |       | e  | 1.21 | 9.5  | 3.4  | 2.8  | E | 有     | ミニチュア甕          |    |
| 太鼓塚3号墳  | 右 |      |      |       |       | e  | 2.06 | 9.9  | 4.5  | 2.2  |   | 付2A   |                 |    |
| 太鼓塚4号墳  | 右 |      |      |       |       | e  | 1.63 | 4.2  | 2.6  | 1.6  | C | 付2A   |                 |    |
| 太鼓塚5号墳  | 両 |      |      |       |       | e  | 1.45 | 14.0 | 4.5  | 3.1  | I | 有     |                 |    |
| 太鼓塚6号墳  | 両 |      |      |       |       | e  | 1.14 | 5.5  | 2.5  | 2.2  | H | 付1A   |                 |    |
| 太鼓塚7号墳  | 両 |      |      |       |       | e  | 1.47 | 4.3  | 2.5  | 1.7  | I | 付1A   |                 |    |
| 太鼓塚8号墳  | 右 |      |      |       |       | e  | 1.56 | 5    | 2.8  | 1.8  | D | 有     | 石棺、ミニチュアカマド' 破片 |    |
| 太鼓塚9号墳  | 両 |      |      |       |       | a  | 0.79 | 13.9 | 3.3  | 4.2  |   |       |                 |    |
| 太鼓塚10号墳 | 両 |      |      |       |       | b  | -    | -    | -    | -    |   | 付1A   |                 |    |
| 太鼓塚11号墳 | 両 |      |      |       |       | b  | 1.15 | 4.6  | 2.3  | 2    | J |       |                 |    |
| 太鼓塚12号墳 | 両 |      |      |       |       | b  | 1.15 | 8.4  | 3.1  | 2.7  | H | 付1A   |                 |    |
| 太鼓塚13号墳 | 右 |      |      |       |       | b  | 1.92 | 2.8  | 2.3  | 1.2  |   |       |                 |    |
| 太鼓塚14号墳 | 小 |      |      |       |       | b  |      |      |      |      |   |       |                 |    |
| 太鼓塚15号墳 | 右 |      |      |       |       | b  | 1.59 | 7.7  | 3.5  | 2.2  | F | 無2B   |                 |    |
| 太鼓塚16号墳 | 右 |      |      |       |       | b  | 1.36 | 6.6  | 3    | 2.2  | A | 付1B   |                 |    |
| 太鼓塚17号墳 | 右 |      |      |       |       | b  | 1.47 | 4.3  | 2.5  | 1.7  |   |       |                 |    |
| 太鼓塚18号墳 | 右 |      |      |       |       | C  | 1.6  | 3.6  | 2.4  | 1.5  | F |       |                 |    |
| 太鼓塚19号墳 | 小 |      |      |       |       | C  | 2.25 | 1.4  | 1.8  | 0.8  |   |       |                 |    |
| 太鼓塚20号墳 | 右 |      |      |       |       | C  | 1.33 | 5.9  | 2.8  | 2.1  | A | 付1A   |                 |    |
| 太鼓塚21号墳 | 小 |      |      |       |       | C  |      |      |      |      |   |       |                 |    |
| 太鼓塚22号墳 | 右 |      |      |       |       | C  | 1.69 | 4.3  | 2.7  | 1.6  | C | 付1A   |                 |    |
| 太鼓塚23号墳 | 右 |      |      |       |       | C  | 1.42 | 5.1  | 2.7  | 1.9  | D | 付1A   |                 |    |
| 太鼓塚24号墳 | 右 |      |      |       |       | C  | 1.29 | 10.1 | 3.6  | 2.8  | A | 付2D   |                 |    |
| 太鼓塚25号墳 | 両 |      |      |       |       | C  | 1.71 | 3.4  | 2.4  | 1.4  |   |       |                 |    |
| 太鼓塚26号墳 | 両 |      |      |       |       | d  | 1.02 | 8.3  | 2.9  | 2.85 | H | 付2D   |                 |    |
| 太鼓塚27号墳 | 右 |      |      |       |       | d  | 1.47 | 6.8  | 3.15 | 2.15 | B |       |                 |    |
| 太鼓塚28号墳 | 両 |      |      |       |       | d  | 1.28 | 4.9  | 2.5  | 1.95 | J |       |                 |    |
| 太鼓塚29号墳 | 右 |      |      |       |       | d  | 1.5  | 7.3  | 3.3  | 2.2  | B | 有     | ミニチュア甕          |    |
| 太鼓塚30号墳 | 両 |      |      |       |       | e  | 0.84 | 12.2 | 3.2  | 3.8  | G |       |                 |    |
| 太鼓塚31号墳 | 小 |      |      |       |       | e  |      |      |      |      |   |       |                 |    |
| 太鼓塚32号墳 | 両 |      |      |       |       | d  | 0.8  | 12.8 | 3.2  | 4    | G | 付1A   |                 |    |
| 太鼓塚33号墳 | 右 |      |      |       |       | d  | 1.6  | 6.4  | 3.2  | 2    | B | 付2D   |                 |    |

図8 太鼓塚古墳群一覧表

古墳群の築造契機である。その後、d 支群の 29 号墳、f 支群の 33 号墳が造られる。この 3 古墳は、同形石室（B 類）である。この B 類は、志賀古墳群全体でも初期に導入された石室平面タイプの一つであることが重要である（堀 2009・2021a）。

Ⅱ期は、古墳の築造が低調であるが両袖式石室の 5 号墳が築造される。志賀古墳群全体でも、両袖式石室が導入される段階は大きな画期となっている。その代表が MT15 型式併行段階に築造された大通寺 C-1 号墳である。この古墳は、志賀古墳群内最大の玄室床面積を誇り、追葬が確認できる初期の例でもある。また、ミニチュアではなく、実用サイズの炊飯具が石室内から出土している。5 号墳は、大通寺 C-1 号墳より築造時期が遅れるものの、玄室の面積が群内でも最大であることは評価できる。玄室比（長さ／幅）が 1.45 と、平面プランは、方形というより長方形を呈している。

Ⅲ期もⅡ期同様に古墳の築造が低調である。

Ⅰ～Ⅲ期に築造される支群（空間）は、c、d、e 群と南側の支群だけである。

Ⅳ期は a、b 群で築造が開始される。そして急激に造墓数が増え、太鼓塚古墳群の造墓のピークとなる。この段階に、玄室比が 1.2 を下回る方形～横長方形の平面プランを呈する両袖式石室が登場する。造墓数の増加に伴い同形石室の数も増える。

Ⅴ期は b、c、e 群に築造されるが、Ⅳ期と比較すると古墳の築造数の減少傾向が著しい。

## 6. 古墳群の形成モデルの提唱（図 7）

本稿では、志賀古墳群内でまとまった調査が行われ、報告書が刊行されていることから、太鼓塚古墳群を検討の素材として選択した。その目的は、すでに述べたように古墳群の形成がどのような原理で行われたかを明らかにすることである。

ここで改めて太鼓塚古墳群の支群の検討と平面プランの検討をとおして明らかになったことを確認しておく。

**支群の検討** 地形的な制約と古墳のまとまりを重視した 7 つの支群に分けることができ、Ⅰ期からⅢ期までは c～f 群、Ⅳ期以降に a、b 群で築造が始まる。

**平面プランの検討** 同形石室は、同じ支群に属さない。同形石室の組み合わせは、2 基 1 組である。そしてミニチュア炊飯具の在り方が共通している。

まず、支群の評価は、地形（谷）を意識した古墳のまとまりであることから、何らかの集団（集団 A～C：図 7）を意味していると仮定する。そのような仮定の下で、同一支群内に同形石室が存在しないことは、集団 A～C 内で規定されたものでないことになる。つまり、同形石室の選択は、支群を形成する集団 A～C においてではなく、別の単位集団に基づくものということになる。では、別の単位集

団とは何か。

別の単位集団を考えるヒントとして、同形石室の検討結果を用いる。同形石室は、2 基 1 組であることから、仮に「夫婦」とすると、同形石室が同一支群にないことは、その「夫婦」が、集団 A～C の別の集団に属することを意味する。だから、それぞれの支群に葬られる。しかし、石室によっては、ミニチュア炊飯具を入れる石室、入れない石室があることから、その有無は、「夫婦」が活動していた集団（集団  $\alpha \cdot \beta$ ）に規定されたとみる。所属する活動集団が、ミニチュア炊飯具を葬送儀礼に使用する集団  $\alpha$  か、使用しない集団  $\beta$  で、ミニチュア炊飯具を入れる石室かどうか決定される。

例えば、集団  $\alpha$  内で活動していた「夫婦（○）」が、亡くなって埋葬される際には、それぞれの集団 A・C の墓域（ $a \cdot c$  支群）に造墓され、埋葬される。

これは、まさに「帰葬」（10）である。志賀古墳群を形成している古墳は、600～1,000 基と考えられており、その数の古墳を古墳群の周辺で活動する集団によって築造されたとするには、活動エリア狭く、想定しづらい。志賀古墳群が所在する比叡山東麓地域は、山麓から湖岸までの距離が非常に短く、生産地としては不向きである。そのように考えるのであれば、当地域に他地域から「帰葬」されたと考えるのが妥当であろう。それは、石室から出土するミニチュアカマドの底の形態が、「付底」と「曲底」の 2 種類が存在しており、「曲底」のモデルとなった移動式カマドの分布は、滋賀県内では長浜地域、滋賀県外では河内地域であることも支持している（中西 1999・辻川 2017・中野 2019）。

このように仮定すると同形石室が、支群を同じにしない理由、また、ミニチュア炊飯具を持つ、持たない理由が説明できる。では、相似形石室は何を示しているのか。相似形石室は、平面プランを同じくしながら床面積が広い石室であることから、活動集団（ $\alpha \cdot \beta$ ）における階層差を反映していると解釈したい。

## 7. おわりにかえて

本稿では、太鼓塚古墳群の調査成果を素材として、古墳群の形成を読み解く作業を行った。そして、その形成の読み解くためのモデルを提示した。このモデルも一つの仮説であることから、今後、さらなる検証が必要となる。また、実態を説明することから構成した仮説であるため、どうしてモデルのような選択をするのか、理由の説明の部分が不足している。例えば、同形石室＝夫婦とする場合、埋葬された石室（古墳）をそれぞれが主体として築造することができたのかなどである。これは、古墳の被葬者の関係性（田中 1995、清家 2010）や群集墳が列島規模で爆発的に築造された歴史的な背景にかかわる問題（近藤 1983、西嶋 1961）である。だからこそ、大きな課題といえる。また、



本稿で取り扱った古墳群の被葬者が渡来人である可能性が高いことから、単純に一般化できないという問題も内包している。しかし、当時の社会を構成していた集団であることには変わりなく、その集団における墓の築造原理を明らかにすることは、社会組織の在り方の一端を明らかにできるものと考えている。

まだ、説明すべき事柄が多くあるが、ほんの少しの前進と捉え、引き続き、課題と対峙していきたい。

## 註

- (1) 志賀古墳群とは、花田氏が提唱した（花田 1993）。そのうえで現在、埋蔵文化財包蔵地として周知されている古墳群の位置づけであるが（滋賀県 2022）、周知の埋蔵文化財包蔵地である古墳群＝支群（各古墳群と呼称）、志賀古墳群＝周知の埋蔵文化財包蔵地である古墳（古墳群）の集合体として使用する。
- (2) 本論では横穴式石室の構造の左右を、奥壁から玄門部を向いた方向で使用する。つまり、右袖式石室とは奥壁からみて右側に袖部を持つ石室を指す。なお、本論の分析で使用する主要な報告書内では逆の表記となっている。
- (3) A型は長方形の平面プランで片袖式、持ち送りがみられる石室、B型は方形あるいは横長長方形の平面プラン、両袖式、持ち送り、天井石が一石である石室、C型は長方形の平面プランで両袖式、天井石を2～3石である石室、D型は長方形の平面プランで無袖式の石室である。
- (4) 松浦氏は、支群の集合体を古墳群ととらえている。つまり、太鼓塚古墳群内の限定されたエリア＝支群、現在、調査によって明らかになっている範囲＝支群として理解し、その支群内に存在する最小単位を「子群」とした。なお、「子群」＝家族を想定している。
- (5) バイパス調査の12基から出土したミニチュアカマドを次のように分類している。なお、型式差を時期差ではなく、製作集団の差として理解している。

**A 型式** 器高 18～22cm、釜口径 11～12cm、裾部径 15～20cm、釜口径／裾部径＝1.35～1.63 を示す。付け底が焚口を全周し、胴部中に突帯（ツバと表現）が巡り、その一部に上向きの把手が付く。調整は内外面ともに縦方向のハケ、裾部にヘラケズリである。その中で、底と突帯の高さが同じものをⅠ類（12・20・22・23 号墳出土品）、突帯が下位にあるものをⅡ類（10・16 号墳出土品）としている。

**B 型式** 器高 23cm 以上、釜口径／裾部径 1.33、焚口に付け底が全周する。突帯は付かないが把手は付加されている。外面はハケ、内面はナデ調整である（15 号墳出土品）。

**C 型式** 手づくねの粗雑な作りで、未焼成のカマド（33 号墳出土品）。

**D 型式** 器高が 17cm 以下の小型品で、付け底である。突帯は付かない。焼成されているが、A 型式や B 型式と比較すると作りが稚拙で、C 型式に近い（24 号墳出土品）。

**A D 形式** 器高、釜口径は A 型式と同じであるが、釜口径／裾

部径が 2.14 と裾の開きが大きい。付け底は D 型式に非常に似ていることから A 型式と D 型式の中間型式である（32 号墳出土品）。

**E 型式** 器高 23cm 以上、釜口径 12～13cm、裾部径 21cm 以上と大型品である。付け底は焚口を全周しない。把手・突帯は付かない。外面はハケのちナデ調整で、全体に調整が甘い（26 号墳出土品）。

- (6) 藤村案は、大津市案と対照するならば、おおむね A 群＝展開期の群②、B 群＝形成・展開期の群、C 群＝展開期の群①、D 群＝形成契機の群に相当し、E 群は展開期の群①と形成契機の群に振り分けられている。以下藤村案について、アルファベットの群名を使う場合は、読み替えているものとする。
- (7) 7 タイプに分けているが（堀 2021a）、太鼓塚 32 号墳タイプと穴太銅込号墳タイプは同一タイプであるため、6 タイプとなる。また、太鼓塚 32 号タイプに含めていた太鼓塚 32 号墳は、大通寺 36 号墳タイプであるため修正する。
- (8) (○／△) は○＝時期、△＝支群を示す。
- (9) ミニチュアカマドの分類は辻川 2017 に準じている。
- (10) 「帰葬」についてはすでに水野氏（水野 1969・1970）、広瀬氏（1978）花田氏（1993）が指摘している概念である。

## 文献一覧

- 岩越陽平（2021）「器種構成からみた群集墳の須恵器副葬について」『群集墳研究の新視角—群集墳からみた古墳時代社会と集団』古代学協会編 六一書房
- 大津市歴史博物館（2016）『渡来した人々の足跡—大津の古墳群と集落跡』
- 小笠原好彦（2000）『近江朝鮮系古代集落の世界』『近江の考古学』サンライズ出版
- 絹帛歩（2021）『群集墳研究と古代学研究会』『群集墳研究の新視角—群集墳からみた古墳時代社会と集団』古代学協会編 六一書房
- 古代学協会編（2021）『群集墳研究の新視角—群集墳からみた古墳時代社会と集団』六一書房
- 近藤義郎（1986）『前方後円墳の時代』岩波書店
- 滋賀県（2022）『滋賀県遺跡地図』
- 清家章（2010）『古墳時代の埋葬原理と親族構造』大阪大学出版会
- 瀬川貴文（2001）『群集墳研究の現状と課題』『東海の後期古墳を考える』東海考古学フォーラム三河大会実行委員会
- 田中良之（1995）『古墳時代親族構造の研究—一人骨が語る古代社会—』柏書房
- 田辺昭三（1966）『陶器古窯址群』研究論集第 10 号 平安学園考古クラブ
- 田辺昭三（1981）『須恵器大成』角川書店
- 辻川哲朗（2006）『横穴式石室の検討』『穴太銅込古墳群』滋賀県教育委員会・公益財団法人滋賀県文化財保護協会 2006
- 辻川哲朗他（2007）『近江の横穴式石室』『近畿の横穴式石室』横穴式石室研究会 2007
- 辻川哲朗（2017）『近江地域のカマド形土器—渡来系集団の動向把

握に向けて一」『紀要』30 公益財団法人滋賀県文化財保護協会  
 中西克宏（1999）『曲げ底系竈を副葬する古墳』『光陰如矢—萩田  
 昭次先生古稀記念論集』光陰如矢刊行会  
 中野咲（2019）『ミニチュア炊飯具からみた大型群集墳について—  
 実用炊飯具との比較を中心として—』『和の考古学—藤田和尊さ  
 ん追悼論文集』なべの会  
 西嶋定生（1961）『古墳と大和政権』『岡山史学』10 岡山史学会  
 花田勝広（1993）『渡来人の集落と墓域』『考古学研究』39 巻4号  
 考古学研究会  
 花田勝広（2002）『河内・大和・近江の渡来人—集住と移動—』『究  
 班』Ⅱ 埋蔵文化財研究会2002  
 広瀬和雄（1975）『群集墳研究の一情況—六世紀代政治構造把握へ  
 の方法論覚書—』『古代研究』7 元興寺文化財研究所考古学研  
 究室  
 広瀬和雄（1978）『群集墳論序説』『古代研究』15 元興寺文化財  
 研究所考古学研究室  
 藤村翔（2007）『近江の横穴式石室—窮隆頂持ち送り石室—』『近畿  
 の横穴式石室』横穴式石室研究会  
 藤村翔（2010）『琵琶湖西南地域における穹隆頂形横穴式石室の展  
 開と特質』『立命館大学考古学論集』Ⅴ 立命館大学考古学論集  
 刊行会  
 藤村翔（2021）『横穴式石室からみた群集墳の集団原理—近江・畿  
 内を中心に—』『群集墳研究の新視角—群集墳からみた古墳時代  
 社会と集団』古代学研究会編 六一書房  
 堀真人（2009）『渡来人の墓—志賀古墳群と一須賀古墳群—』『紀要』  
 22 財団法人滋賀県文化財保護協会  
 堀真人（2012）『横穴式石室の葬送原理を考える—志賀古墳群を中  
 心に—』『龍谷大学考古学論集Ⅱ』龍谷大学考古学論集刊行会  
 堀真人（2019）『志賀古墳群における葬送儀礼—副葬土器配置の検  
 討から—』『紀要』32 公益財団法人滋賀県文化財保護協会  
 堀真人（2020）『「滋賀郡所在の漢人系帰化氏族とその墓制」以後  
 —水野論文からみた現在地—』『龍谷大学考古学論集Ⅲ』龍谷大  
 学考古学論集刊行会  
 堀真人（2021a）『横穴式石室の空間設計の検討』『紀要』34 公益  
 財団法人滋賀県文化財保護協会  
 堀真人（2021b）『横穴式石室の空間と葬送儀礼—大和のいわゆる  
 渡来人系古墳を素材として—』『文化遺産研究』第5号 龍谷大  
 学文化遺産学研究会  
 松浦俊和（2003）『古代近江の原風景』サンライズ出版  
 水野正好（1969）『滋賀郡所在の漢人系帰化氏族とその墓制』『滋  
 賀県文化財調査報告書』第4冊 滋賀県教育委員会  
 水野正好（1970）『群集墳と古墳の終焉』『古代の日本』第5巻  
 近畿 角川書店  
 森智美（2007）『構築技術からみた湖西南部の横穴式石室』『考古  
 学論究』小笠原好彦先生退任記念論集  
 吉水真彦（2005）『六・七世紀における近江の渡来文化』『ヤマト  
 王権と渡来人』サンライズ出版

#### 【報告書】

大津市教育委員会（1980）『滋賀里・穴太地区遺跡発掘調査報告書Ⅰ』  
 大津市文化財調査報告書（12）  
 大津市教育委員会（1992）『太鼓塚遺跡発掘調査報告書』大津市埋  
 蔵文化財調査報告書（19）

#### 挿図典拠

図1 国土地理院1/25,000地形図「大原」「京都東北部」「堅田」「草  
 津」に拠り、堀作成  
 図2・4～6 大津市教育委員会（1980・1992）に拠り、堀作成  
 図3 大津市教育委員会（1992）、小笠原（2000）、松浦（2003）、  
 藤村（2021）より引用、一部堀加筆  
 図7・8 堀作成

（ほり まさと：総務課 副主幹）

**ANNUAL BULLETIN**  
**of**  
**Shiga Prefectural Association for Cultural Heritage**  
**Vol.36 2023.3**

私たちは文化財をととして  
ゆたかな滋賀づくりに貢献します。



公益財団法人滋賀県文化財保護協会  
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritages